

(Abstract)

Surnames, Myths, and Ancestor Consciousness in East Asia: A Comparative Perspective

Guanglin Jin(Niigata Sangyo University)

It has been well known that throughout the human history the foundational myths or legends of tribes or kingdoms were created and circulated in order to establish and maintain the legitimacy of the power and authority of the emergent ruling groups. The foundations myths of East Asia were not an exception; China, Korea, Japan and Vietnam all have many myths and legends related to the dominant clans and royal families of kingdoms that held power at one or more points of their history. This cross-regional phenomenon found in the last names of many of East Asia, however, hardly have been studied on comparative terms, with the region as a whole being the focus of study. With a view to finding the historical interconnections among the patterns of the formation of the surnames of China, Korea, Japan and Vietnam, this paper analyzes the characteristics of each nation's surnames both genealogically and cross-regionally.

When juxtaposed and compared with each other, the surnames of each of the four East Asian countries exhibits the following patterns. First, in the case of China, approximately 90% of 120 surnames, which are used by 90.11% of the entire Han Chinese population, claim family pedigrees that trace back to the legendary the Three Sovereigns and Five Emperors, to the Yan Emperor and Yellow Emperors in particular. This tendency to connect the family's origin to China's prominent foundational legends dates back to the Zhou dynasty, and since then this genealogical desire came to form what may be called 'ancestor consciousness' in the subsequent historical records such as *Zuo Zhuan* (Chronicle of Zuo), *Guoyu* (Discourses of the States), *Shiben* (A Book of Ancient Chinese Genealogy), *Shiji* (Historical Records), *Hanshu* (Book of Han), *Qianfulun* (Comments of A Recluse)], forming the grounds for the Han Chinese collective identity.

The population living in the Korean peninsular initially did not use the last names, but their contacts with the Han Chinese led them to adopt the system of using surnames, which became a predominant pattern. As they also create and circulated the native foundational myths and legends, from which specific surnames were derived, the royal families and aristocrats of Koguryŏ, Silla, and Kaya Koreans used last names, which were not so common in China. In the Chosŏn dynasty, those surnames used by

its aristocracy have a strong connection to the surnames of Silla and Kaya—a definitely stronger more connections than those of Koguryō, Paekchh, and Koryō, the kingdoms that were put to an end by another kingdoms. At the same time, a number of the surnames drawn from Chinese legendary and historical figures and their descendents constituted one aspect of the surnames of Chosŏn Korea.

Surnames in Japan were also marked by the co-presence of indigenous and foreign-influenced origin. According to *The Newly Edited Register of Family Names* (815), which referenced 1,182 Japanese clans residing in the capital and its vicinity, the Japanese population was divided into three groups: the imperial, the god's, and the foreigners' descendents. The four foremost Japanese clans—that is, Minamoto clan(Genji), Taira clan(Heishi), Fujiwara clan, and Tachibana clan—who held the power in the wake of the Heian period belonged to the first two lines, ones that belong to the descendants of gods, who are referenced in both *Record of Ancient Matters* as well the *The Chronicles of Japan* myths. They held a higher position in a social hierarchy than the last group of royal and aristocratic lines, that is, the offsprings of the royal families and aristocrats of China and Korea. Hence the prestigious and powerful clans increasingly found their ancestral roots in the legends or the reference to their ancestors in the aforementioned records.

In contrast with Korea and Japan, the history of Vietnamese surnames gives little indication of indigenous formation. Instead, the Chinese-style family names are predominant. Of the fifteen largest surnames in Vietnam—Nguyễn, Trần, Lê, Phạm, Huỳnh/Hoàng, Phan, Vũ/Võ, Đặng, Bùi, Đỗ, Hồ, Ngô, Dương, Lý, and Quách, which occupy 87% of the whole Vietnamese population as of 2005, a good number of them are drawn from previous dynasties' surnames; equally important, many of them find their ancestral origin in Chinese families.

Thus, highlighting that many of East Asian surnames were originated from the royal family names, which genealogically trace back to the foundational myths and legends of the given region, the paper argues for the inextricable relationship between the ancestor-consciousness and the foundational myths that have been a the core of the formation of the surnames in East Asia. With China, Korea, Japan, and Vietnam as a primary regional concern, the paper purports to expand its ken to the last names of Manchuria, Mongol, Ryukyu, and Chinese minorities, widening its horizon of reach as much possible.

東アジアにおける姓氏の発生と祖先意識及び神話伝説

新潟産業大学 金 光林

1. はじめに

東アジアの中国、朝鮮、日本、ベトナムの姓氏には、王族に由来する姓氏が多く、その王族の系譜が神話伝説に遡ることが多い。

中国の漢民族の姓氏の中でよく使われている120個の姓氏(大姓)が漢族人口の90.11%を占めると言われている。この120個の漢族の大姓の中で約90%以上は系譜的にその由来を確認できるが、そのほとんどが中国の伝説上の三皇五帝に源流を求めている。古代中国の王族、名門貴族がその氏族の源流を伝説上の三皇五帝に求める傾向はすでに周代には存在していたと見られる。周代に存在していたこのような意識は中国の姓氏に関する『左伝』『国語』『世本』『史記』『漢書』『潜夫論』などの書物によって記録され、以後も著述された姓氏に関する多くの書物によって継承され、漢民族の祖先意識の特徴となっている。

古代の朝鮮社会には最初は名前だけ存在し、姓氏がなかったが、中国との接触を通して中国文化の影響を受けながら中国式の姓氏、即ち「漢姓」が導入され、普及されていった。この過程で高句麗、百濟、新羅、伽倻の王族たちは始祖たちの神秘的な誕生神話と関連させながら王族の姓を創製した。そのためにこれらの王族の姓は中国では珍しいか、あるいは存在しない姓であった。このような方式の姓氏の創製は王族に限るものではなく、一部の貴族たちにも見られた現象である。以後、朝鮮の姓氏の普及過程で、新羅、伽倻、朝鮮王朝(李朝)の王族と関連する姓氏が朝鮮の姓氏の主流を占めるようになり、王朝が他の勢力によって滅亡された高句麗、百濟、高麗の王族と関連する姓氏はかなり少ない。朝鮮の姓氏には中国の伝説上の人物、歴史人物の子孫と名乗る姓氏が多いのももう一つの特徴である。

日本の古代の氏姓制度の確立期に編纂された『新撰姓氏録』には、当時の近畿地域の1,182氏族が「皇別」「神別」「諸藩」という三つのカテゴリー分類され、「皇別」と「神別」に分類される氏族たちは日本の記紀神話の中の神々の子孫とされている。そして『新撰姓氏録』の中で「諸藩」に分類された外来氏族はいずれも中国と朝鮮の王族、貴族の子孫ということになっている。『新撰姓氏録』においては、当時の日本社会での実質的な地位と関係なく、記紀神話の神々の子孫とされる「皇別」「神別」に属する氏族たちを外来氏族より上位に位置させていて、古代日本の姓氏の体系の中で外来的な氏族より土着的な氏族に優越性を付与していた。日本では平安時代以降に権勢を誇っていた源氏、平氏、藤原氏、橘氏などの四大氏族はいずれも家系図的に記紀神話の神々の子孫ということになり、以後、

日本の伝統社会では有力な氏族は祖先の起源を記紀神話、または皇族に求める傾向が濃厚になった。

ベトナムの姓氏の形成においては固有の姓氏の存在があまり見当たらず、漢姓を採用するが多い。2005年の統計によると、ベトナムで人口数の多い15の姓氏は阮、陳、黎、黄、範、潘、武、鄧、裴、杜、胡、吳、楊、李、郭であり、これらの15の姓氏がベトナムの人口数の87%を占めるという。そしてこれらの姓氏はベトナムにおける歴代の王朝の国姓の場合が多く、始祖の起源を中国に求めることも多い。

本発表においては、東アジアの中国、朝鮮、日本、ベトナムの姓氏には、王族に由来する姓氏が多く、その王族の系譜が神話伝説に遡ることが多いという現象に着目し、世界における姓の発生史を眺望しながら、東アジアの姓氏発生過程における姓氏と祖先意識と神話伝説の関係を究明したい。本発表においては、中国、朝鮮、日本、ベトナムの姓氏を主な研究対象にするが、研究視野を満州、モンゴル、琉球、その他の中国周辺の異民族の姓氏にまで広げ、東アジアの姓氏の発生過程における祖先意識と神話伝説の関係について幅広い検討を行う考えである。

2. 中国における姓氏の形成とその特徴

姓氏は人間の血族関係、家柄を示すために名前の前につける標識である。中国の文字に関する最初の字典である『説文解字』に「姓人之所生也」とあるように、古代の中国では姓は同一の祖先に出自する血縁集団を指しており、これに対して氏は姓を構成する個々の家柄、または同一の祖先から分岐した家柄を意味していたが、東周の頃から姓と氏は混用されるようになり、秦漢時代には姓＝氏という傾向が顕著となった。

中国の姓の起源は原始部族の名称、または部族の首領の名前に由来したようである。そして中国の姓は母系社会から始まったために、最古の姓は「姬」「姜」「姚」「嬴」など女偏からなることが多かった。姓は原始部族の血縁の指標として生まれ、血縁関係を区別する生物的機能を持ち、近親の通婚を防ぐ役割を果たした。後に原始部族の人口の増加、さらに人間の移動・逃亡などにより部族の分岐が行われて支族が生まれると、それらの支族の名称が氏と呼ばれるようになった。古代の中国においては氏の発生過程が父系社会と重なり、家族の血縁関係は父系血統が重んじられるようになった。姓は血縁関係の区分を表すものであるが、氏は家族の社会的地位を示す機能を持ち、周代には、天子が貴族たちに血縁関係によって姓を、封土によって氏を賜ったのである。西周時代の分封制、「賜性命氏」制度により、この時期に中国の姓氏は大量に生まれることになった。

春秋時代、特に戦国時代に至って周朝の分封制と宗法が瓦解し、嫡長子継承を基礎とする「世卿世祿制」は段々と廃止され、従来の氏は社会的に貴賤を分ける意味を持たなくなった。そこから姓と氏の区別が無くなり、姓氏の合一がなされるようになった。秦漢以降、中国では姓と氏と区別が完全になくなり、「姓氏」と呼ばれるようになった。しかし、姓と

氏の区別が無くなった代わりに、漢代には「地望」という言葉を用いて家柄の貴賤を示すようになり、「地望」とはある家柄が特定の地域で名門貴族であるという意味である。このような慣習は魏晋南北朝の特に盛んになり、隋唐の時に続き、後に「郡望」と呼ばれることが多くなった。例えば、魏晋南北朝から隋唐に至るまで中国北方地域の四大郡望を形成していた範陽蘆氏、清河崔氏、滎陽鄭氏、太原王氏などである。郡望としては、魏晋時代の陳郡謝氏、瑯王氏などが有名であった。朝鮮の姓氏体系の中で使われる「本貫」(common ancestral seat) という概念は古代中国の氏の概念、「郡望」の概念とかなり似ている。

中国の姓氏の構造は基本的に周代に確立された。そして中国の漢民族の大半の姓氏は秦漢以前の「氏」に由来している。

古代における中国の姓氏の起源は概ね次の分類できる。

- (1) 帝王あるいは諸侯の領地名、またはそれと関連する邑名、河川名、山名等に由来するもの。
- (2) 祖先の諡(おくりな)及び字などを長く伝えるため姓氏に転用したもの。
- (3) 官職名から転じたもの。
- (4) 帝王あるいは時の支配者から賜ったもの。
- (5) 動・植物の名によるもの。
- (6) 帰属部族および周辺の異民族の漢姓化したもの。
- (7) 革命あるいは亡国等により改姓したもの。
- (8) その他の事情によるもの。

中国の姓氏の数に関しては、唐代の『元和姓纂』に1, 233個が収録され、宋代の『姓解』には2, 569個、明代の『万姓統譜』には3, 700個が収録された。1981年に北京出版社が刊行した『中国姓氏大全』には、5, 600個、1996年に教育科学出版社が刊行した『中華姓氏大辞典』には、歴史上と現代の中国の姓氏11, 969個が収録された。しかし、現代に中国人が常用する姓氏は約3, 000前後といわれ、その中で漢民族の常用姓氏は約500個程度だといわれる。

東アジアにおける姓氏の形成という枠組みの中で中国の姓氏の特徴を捉えると、まず、姓氏がかなり古い時代から形成され、東アジアにおける姓氏形成の先鞭をつけたことである。次に、漢字を用いる中国式の姓氏、即ち「漢姓」は中国人だけではなく、中国内及び周辺の異民族にも広く取り入れられたということである。それから古代中国の王族、名門貴族はその氏族の源流を中国の伝説上の三皇五帝に求めることが多く、姓氏が古代中国の伝説と関連しながら形成されていった。古代の王族、名門貴族たちがその氏族の源流を神話・伝説上の最も権威のある人物に求める現象は朝鮮、日本の姓氏の形成においても見られるように漢字文化圏の姓氏のほぼ共通した特徴だと考えられる。

中国の漢民族の姓氏の中でよく使われている120個の姓氏(大姓)が漢族人口の90.11%を占めると言われている。この120個の漢族の大姓の中で約90%以上はその由来を確認できるが、そのほとんどが中国の伝説上の三皇五帝に源流を求めている。具体的

に述べると、黄帝に源流を求める姓氏が86個、72%であり、炎帝に源流を求める6個、5%であり、東夷族と呼ばれる太昊・少昊に源流を求める姓氏が8個、7%であり、黄帝と炎帝の両方に源流を求める姓氏が11個、9%であり、黄帝と太昊・少昊に源流を求める姓氏が9個、7%である。この比率からすると、現在の漢族の120の大姓の大半が黄帝に源流を求めていることになる。ここで注目されるのは、明らかに漢族とは異なる異民族である匈奴、鮮卑までも記録の上では黄帝に源流を求めていることである。『史記』「匈奴列伝」に「匈奴、其先祖夏后之苗裔也」に記載されており、『新唐書』「宰相世系」に「黄帝生昌意、昌意少子嫫、居北、十一世為鮮卑君長」と記載されており、『魏書』にも鮮卑の皇族拓跋氏が黄帝の子孫であると記載されている。

古代中国の王族、名門貴族がその氏族の源流を伝説上の三皇五帝に求める傾向はすでに周代には存在していたと見られる。戦国時代の屈原の『離騷』が「帝高陽之苗裔兮、朕皇考曰伯庸」という句から始まり、屈原が自分の父が黄帝の孫といわれる高陽の子孫であると名乗っていた。周代に存在していたこのような意識は中国の姓氏に関する『左伝』『国語』『世本』『史記』『漢書』『潜夫論』などの書物によって記録され、以後も著述された姓氏に関する多くの書物によって継承されたと考えられる。中でも、司馬遷が著した『史記』では五帝や夏・殷・周に関わる伝聞や記録、伝説を一貫した因果関係を持たせて史書に組み立てたのであり、中国の漢民族の歴史観と祖先意識を決定づける重要な書物となったのである。

中国漢民族の大姓の多くは祖先の源流は伝説上の三皇五帝に求めながらも、実際の姓氏はその三皇五帝にまつわる姓氏がそのまま継承されることは少なかった。このような現象は大姓の多くが祖先の源流を伝説上の三皇五帝に求めることが観念的であり、実際の事実とかけ離れていることを裏付けると思われる。

3. 「漢姓」の拡がり一周辺異民族の中国式姓氏の受容

中国人の姓氏、即ち「漢姓」はすでに周代の頃から中原周辺の異民族に受容されたことが中国の古代の文献から断片的に確認できる。東漢の末年には、漢王朝の和親政策により南匈奴人が漢語を話し、漢字を用い、漢民族の姓氏を取り入れて、貴族は「劉」「呼延」「ト」「蘭」「喬」「郝」などの漢姓を名乗った。

中国で漢民族と周辺の異民族の民族融合が大いに進んでいた魏晋南北朝時代に、周辺の異民族の中国式姓氏、即ち漢姓の受容が著しかった。まず、五胡十六国時代に中国の華北地域に進出した匈奴、鮮卑、羯、氐、羌など五胡と言われた異民族が漢民族の文化を受け入れ、漢姓を採用していた。南北朝時期には、北魏の鮮卑族が一段と漢化政策を進め、ほぼ完全に漢姓を受容した。北魏の文帝は鮮卑族の複音の姓を単音の漢姓に改めるようにし、496年に王族の姓氏を拓跋氏から元氏に改め、貴族層には丘穆陵氏から穆氏、步六孤氏

から陸氏、賀頼氏から賀氏、独孤氏から劉氏、賀楼氏から楼氏、勿忸于氏から于氏、紇奚氏から嵇氏、尉遲氏から尉氏という八つの漢姓を創製した。

唐代には、北方の突厥の中に阿史那という姓を史という漢姓に改めたり、唐王朝の国姓である李氏を賜るものもいた。唐代には、南方の南詔国でも、蒙、孟、楊、段、趙などの漢姓を取り入れていた。唐代には西域の異民族が漢姓を受容した記録も見える。

唐代以降、五代十国、宋・遼・西夏・金・元へと王朝の交替と並立が繰り返される中で、中国周辺の異民族による漢姓受容の現象は引き続き行われた。遼の太祖耶律阿保機は漢の高祖を敬慕したので劉氏を名乗り、遼の太宗は契丹人の外戚に蕭氏を名乗らせた。

金朝、元朝の時代にも、女真族、モンゴル族の中から漢姓を受容する事例が多く見られた。金朝では女真族式と漢民族式の姓氏と名前を二重に使う場合があった。チベット系の王朝と見られる西夏でも王族が李氏を使用し、漢姓を受容していたことが分かる。しかし、西夏も一方では漢姓を使用しながら、一方では民族の固有の姓氏も多数使っていた。

中国最後の王朝であり、且つ異民族の王朝であった清王朝を建てた満州族は女真族に由来し、その姓氏も女真族の複音式を継承した。満州族は中国大陸を支配している間に、固有の姓氏を維持することに努め、貴族が姓氏を漢姓に改めることが禁止されていたという。この伝統はほぼ清王朝を通して維持されていたが、1911年の辛亥革命以後、ほとんどの満州族が漢姓に改めた。例えば、満州八大姓といわれる佟佳氏を佟氏、瓜爾佳氏を関氏、馬佳氏を馬氏、索綽多氏を索氏、斉佳氏を齊氏、富察氏を富氏、納喇氏を那氏、鈕祜祿氏を郎氏（一部を鈕氏）に改めた。

中国の歴史上では、漢民族の漢姓が周辺民族に受容されることが多かったが、遼・金・元など異民族の王朝において漢民族が異民族の姓氏を使用する事例も現れることがあった。その場合は異民族の権力者による漢民族への賜姓が多かった。

ここにおいて、中国周辺の異民族の固有、または独自の姓氏と漢姓との関係について論じたい。

中国周辺の異民族には、元は姓氏という概念が普遍的には存在せず、氏族・部族の名称に人の名前を連ねて使う場合が多かったと思われる。それが漢民族との接触の過程で氏族・部族の名称が姓氏として使われ、姓氏の概念が広がったと思われる。

『金史』「百官志」、『統通志』には、金朝を建立した女真族の民族固有の姓氏数十個が収録されている。この事実から女真族にはすでに固有の姓氏が存在していたことが分かる。女真族は中原地域に進入してから民族固有の姓氏と漢姓を二重に使うことになった。『金史』に付録されている「金国語解」には女真族の固有姓氏と漢姓との対応関係が多数示されていた。例えば、完顔を漢姓では王、烏古倫を商、徒単を杜、女奚を郎、兀浴を朱、蒲察を李、顔蓋を張などである。

女真族を継承した満州族には、清朝の時に編纂された『八旗満州氏族通譜』、『欽定皇朝通志』に姓氏が約650個程度収録されていた。この事実から満州族も多くの姓氏を持っていたことが分かる。

満州族の姓氏は(1)部落の名前、(2)地名・山川の名前、(3)女真族の古い姓氏、(4)支配者が賜ったもの、(5)自然現象・動植物の名前、(6)漢姓などから由来したと言われる。

近代に入って満州族が民族固有の姓氏を漢姓に変更する時には、主に(1)民族固有の姓の最初の発音と同じ漢字、いわゆる諧音の漢字を充てるもの(温迪罕→温、完顔→王、抹顔→孟)、(2)満州語の意味を漢姓に直すもの(阿克占→猪→朱)などの方法を取っていたと言われる。

モンゴル民族は中国の漢民族と全く同じ概念の姓氏を持っていなかったと見られるが、モンゴル語でオボク(obok)と呼ばれる血縁共同体の氏族の出自、系譜を子孫に継承させる意識はかなり高かったと言われる。モンゴル民族の姓氏は主に(1)氏族の名前、(2)部落の名前、(3)職業の名前、(4)地名・山川の名前などから来たと言われる。

内モンゴルでは漢姓を使うモンゴル族がいるのだが、その場合、漢姓の採用の方法は満州族が漢姓を採用する場合とかなり似ている。例えば、奇渥温(または乞彦)→奇、孛児只斤(または博爾濟吉特)→包・宝、富格日特→富などがその例である。

中国周辺の異民族が漢姓を受け入れる場合、自民族固有の姓氏が存在する場合は、固有の姓氏と漢姓との葛藤・摩擦が存在していたはずであり、両者を二重に使う場合もあるが、自民族固有の姓氏を維持する努力もなされていた。清朝は満州族の貴族が漢姓を採用することを禁止していたし、中国の周辺民族の中で歴史上漢化政策を最も積極的に推し進めていた鮮卑族でさえ、漢化の推進者であった北魏の孝文帝の後、西魏では一時は漢姓を鮮卑族の固有の姓氏に戻す動きがあったのである。

中国周辺の異民族の中でベトナム人の姓氏であるが、ベトナム人の姓氏は約数百程度だと言われている。ベトナムの姓氏の形成においては固有の姓氏の存在があまり見当たらず、漢姓を採用するケースが多かったと見られる。2005年の統計によると、ベトナムで人口数の多い15の姓氏は阮、陳、黎、黄、範、潘、武、鄧、裴、杜、胡、呉、楊、李、郭であり、これらの15の姓氏がベトナムの人口数の87%を占めるといふ。この中で阮氏が人口の38.4%、陳氏が11%、黎氏が9.5%を占め、この三つの姓氏だけでベトナムの人口の半分を超えることになる。しかし、これらの姓氏はベトナムにおける歴代の王朝の国姓の場合が多く、始祖の起源を中国に求めることも多い。朝鮮の姓氏の場合もそうであるが、始祖が中国に起源すると言われる場合の多くが実際の実事と関連がなく、漢姓を受け入れ、中国の漢民族と同じ姓氏を使うことによってベトナムにおけるそれぞれの姓氏の始祖が中国に起源すると言われてきた可能性が高いと思われる。

ベトナムでは漢姓を使いながらも、中国と違う独自の使用方法が存在していた。

ベトナム人の名前の付け方は、姓+間の名(塾字)+名の順序であり、姓はほとんどが漢字1字であり、「間の名」は男女の区別、兄弟の間で上下を明確にするために使われ、この「間の名」に使われる文字はある程度決まっている。男性の場合は「文」を多く使い、女性の場合は「氏」だけを使っている。

何曉明著『姓名と中国文化』（人民出版社、2001）によると、現在の中国内の少数民族の姓氏に関しては、凡そ次のような三つのカテゴリーに分類できるという。

「有名有姓」：チワン族（壮族）、満州族、モンゴル族、回族、チベット族など約40以上の民族が「有名有姓」である。

「有名無姓」：タイ族、高山族、メンパ族（門巴族）、トーロン族（独龍族）など10以上の民族がこのパターンに該当する。

「連名制」：姓を持つ、または持たない場合があるが、連名は父子・母子などの連名である。ウイグル族、ウズベク族、カザフ族など20以上の民族がこのパターンに該当する。

以上の分類から見ると、「有名有姓」の民族の中で中国の漢民族の姓氏、即ち「漢姓」を受容した比率が高いと考えられる。

4. 朝鮮における姓氏の形成と特徴

朝鮮の姓氏は中国文化が輸入され、漢字が使用されてから形成された。6世紀に建立された新羅の石碑には人の姓氏は見えず、名前と所属の部族名、または村落名だけが見える。これは古代の朝鮮社会には人の名前だけ存在し、姓氏が使用されていなかったことを裏付ける。古代の朝鮮は中国と接触しながら中国式の漢姓を受容したのである。三国時代に高句麗と百済では4世紀から5世紀にかけて、新羅では6世紀頃から王族と中央の貴族層の中で姓氏が使われていたと見られる。

朝鮮における姓氏の形成と普及過程を時期別に見ると、王族と中央貴族層の中で中国式の漢姓が使用された時期は三国時代後期から統一新羅時代に及び、社会の支配層の中で姓氏が普及し、姓氏と本貫（祖先の本籍地、common ancestral seat）体系が確立されたのは高麗時代初期からである。高麗時代初期である1055年に姓氏を持つ者だけに科挙試験に受験できる資格を与えるという法令が公布され、この時期に高麗の支配層の中で姓氏の普及が加速化された。そして高麗時代の全般にかけて良民層に姓氏が拡大された。しかし賤民層に姓氏が普及され始めたのは16世紀の末からであり、1894年の近代的身分解放によって姓氏が朝鮮で完全に普及され、1909年に制定された民籍法によって誰でも姓氏と本貫を持つように法制化された。

朝鮮の姓氏の数は統計によって若干異なるが基本的に二百数十個程度である。朝鮮で最初に姓氏について体系的に整理した文献である『世宗実録』「地理志」（1454）には265個が記録され、その次の姓氏に関する体系的な文献である『東国輿地勝覧』には277個が記録されている。1930年の人口調査では韓国の姓氏が250個として知られ、韓国における2000年の人口調査では姓氏が286個、本貫が4、179個であった。

朝鮮の姓氏には、「本貫」という概念があるが、この本貫は始祖、または中始祖の出身地、または定着地に基づいて定めるので、同じ姓であっても氏族の発展過程で新しい本貫が多く生まれるので、姓氏の10倍以上に本貫が多いわけである。

朝鮮で姓氏が形成された過程を分析してみると、次のような特徴が見つかる。

①古代の朝鮮社会には最初は名前だけ存在し、姓氏がなかったが、中国との接触を通して中国の影響を受けながら中国式の姓氏、即ち「漢姓」が導入され、普及されていった。この過程で高句麗、百濟、新羅、伽倻の王族たちは始祖たちの神秘的な誕生説話と国名に結びつけながら王族の姓を創製した。そのためにこれらの王族の姓は中国ではかなり珍しいか、あるいは存在しない姓であった。このような意味から考えると、古代朝鮮の諸王国は中国式の漢姓を無条件に受容したわけではなく、諸王国の始祖たちの誕生説話または国名に結びつけながら主体的に姓を作ったのである。このような方式の姓氏の創製は王族に限るものではなく、一部の貴族たちにも見られた現象である。

②朝鮮の貴族層が漢姓を受容する過程でも独自の努力を見つけることができる。高句麗と百濟の貴族層の姓氏の中には中国の姓氏をそのまま受容する場合もあったが、始祖の誕生説話と関連させたか、人々の名前の一部を取ったか、部族名から取ったような姓氏も使用された。高麗を建国した太祖王建は自分を国王に推戴した開国功臣たちに彼らの名前の最初の発音と似たような姓を賜ったのである。このような現象はモンゴル族、満州族、その他の中国周辺の異民族の中国式姓氏の受容過程でも見られている。

しかし、新羅の貴族たちの姓氏からはこのような独自の努力が見られず、当時、唐で有力な姓氏であった李、崔、孫、鄭、裴、薛を新羅の6部族の名前の代わりに使用された。

③高麗時代に入り、支配層の中で姓氏が普及され、高麗時代の全般にかけて姓氏が良民層にまで拡大されていく過程で中国式の姓氏、即ち漢姓は大量に受容された。この過程で本来は始祖たちが中国出自でないにも関わらず漢姓を受容しながら始祖たちを中国出自と名乗る場合がけっこう存在したと見られる。三国時代、統一新羅時代にも事実関係とは無関係に始祖たちを中国出自とする場合が存在したと見られるが、高麗時代に入り、漢姓が普及される過程で中国と同じ姓氏を使用するという理由から始祖たちを中国出自とする現象が深化されたと見られる。三国時代、統一新羅時代を経て中国の文物が大量に輸入され、漢字、儒教、中国式社会制度が定着されながら朝鮮の上流層の中に中国に対する憧憬意識、即ち慕華思想が深化し、このような意識が背景にあったから朝鮮では始祖を中国出自とする外来姓氏が大量に創製されたと判断できる。もちろん、前近代には朝鮮に中国からの移住民がかなり多かったので、実際に始祖たちが中国出自による姓氏も多い。

朝鮮で漢姓を受容する過程で始祖たちを中国出自と名乗る現象は高麗時代に限るものではなく、朝鮮王朝時代にまで持続された。何故なら高麗時代には支配層には姓氏が基本的に確立されたが、良民層と賤民層にまで姓氏が普及されたのは朝鮮王朝末期にまで及ぶからである。一方、各氏族の由来を記録する家系図（族譜）が高麗時代に中国から受容され、それが普及されるのは朝鮮王朝時代に入ってからである。家系図が普及される過程で姓氏の起源を新しく作り出すことが多かったと考えられる。

④朝鮮の姓氏の中で始祖たちの中国出自による外来姓氏がかなり多い（朝鮮の280個あまりの姓氏の約半分が外来姓氏であり、その大半が始祖たちの中国出自説を名乗っている）にも関わらず、朝鮮で人口数が一番多い姓氏の中にはいわゆる外来姓氏が少なく、土着姓氏が人口の多数を占める現象も注目に値する。

韓国での2000年の人口調査によって確認された人口数が多い10番までの姓氏は金氏、李氏、朴氏、崔氏、鄭氏、姜氏、趙氏、尹氏、張氏、林氏の順であり、人口数が多い10番までの本貫は金海金氏、密陽朴氏、全州李氏、慶州金氏、慶州李氏、慶州崔氏、晋州姜氏、光山金氏、坡平尹氏、清州韓氏の順であった。この中で、始祖の中国出自を名乗る氏族は趙氏、張氏、林氏、清州韓氏であるが、このようないわゆる外来姓氏より土着の姓氏が人口数の上では絶対的に多い。事実、高麗時代後期から朝鮮王朝時代にかけて始祖が外部から移住してきた外来姓氏はほとんど稀少な姓氏であって人口数も比較的少ない。趙氏、張氏、林氏、清州韓氏などのような人口数が多い姓氏も始祖たちの中国出自説を名乗るが、それが確実な事実である可能性はそれほど高くないはずである。このように見ると、朝鮮の姓氏の中で外来姓氏がほとんど半分くらいに及びながらも実際の人口数では外来姓氏が多数を占めていないことが分かる。

朝鮮の姓氏の普及過程で、新羅、伽倻、朝鮮王朝（李朝）の王族と関連する姓氏が朝鮮の姓氏の主流を占めるようになり、王朝が他の勢力によって滅亡された高句麗、百濟、高麗の王族と関連する姓氏はあまり増加しなかったのである。そこで新羅、伽倻、朝鮮王朝（李朝）の王族と関連する金、朴、李などの姓氏が朝鮮では特に多いわけである。

5. 日本における姓氏の形成と特徴

古代の日本では、氏（うじ）は血族集団を指す名称であり、姓（かばね）は有力な氏族の職業か家柄の地位を指す世襲的名称であった。古代の中国で姓が血族集団を指す名称であり、氏が姓の系統を区別するために使用されたのと相反する概念として使用された。

日本の姓氏制度は5世紀頃から成立したと推定されている。5世紀は日本の古代国家の創立期であり、大和王権が全国的に支配体制を形成する過程で氏姓制度が成立し、中央の貴族、地方の豪族たちは大和王権に対する貢献度、社会的地位によって王権から氏と姓を賜り、その特権的地位を世襲した。このような氏と姓は地名、官職名に由来するものが多かったと見られる。古代国家の確立期であった7世紀の後半に真人（まひと）、朝臣（あそみ）、宿禰（すくね）、忌寸（いみき）、道師（みちし）、臣（おみ）、連（むらじ）、稻置（いなぎ）など8種類の姓が制定され、氏姓制度は定着し、良民たちも氏を持つようになった。

平安時代中期頃から古代の氏姓制度が崩壊されていく過程で、職業か家柄の地位を示す世襲的な姓は漸次使用されなくなり、特定の家族集団を示す名称として名字（または苗字、みょうじ）が使用され始め、名字は中世全般にかけて支配層の間で普及され、近代の明治

維新期に入り、封建制度が廃止されたので、日本では誰でも名字を使用できるようになった。日本の名字は氏を発展的に継承したものと考えられる。

日本の姓氏の形成過程を調べてみると、まず目に付く特徴は、漢字を使って姓氏を示しながらも中国式の漢姓をそのまま受容しなかったことである。

日本の古代の氏姓制度の確立期に編纂された『新撰姓氏録』の姓氏と氏族の分類を調べてみると、日本の姓氏の特徴がよく反映されている。

『新撰姓氏録』には、当時の近畿地域の1,182氏族が「皇別」「神別」「諸藩」という三つのカテゴリー分類され、「皇別」と「神別」に分類される氏族たちは日本の記紀神話の中の神々の子孫とされている。そして『新撰姓氏録』の中で「諸藩」に分類された外来氏族は当時の近畿地域の1,182氏族の中の約3分の1ほどである。

『新撰姓氏録』においては、当時の日本社会での実質的な地位と関係なく、記紀神話の神々の子孫とされる「皇別」「神別」に属する氏族たちを外来氏族より上位に位置させていて、古代日本の姓氏の体系の中で外来的なものより土着的なものに優越性を付与していたことが分かる。これは朝鮮の古代王族たちが中国式の漢姓を受容しながらも始祖たちの神秘的な誕生説話と関連させながら新しい姓氏を創製したのと似た性格を持つ。

『新撰姓氏録』の中で「諸藩」に分類された外来氏族は当時の近畿地域の1,182氏族の中の約3分の1ほどであったが、これらの外来氏族の姓氏を調べてみると、一部の王族たちが出身国の国名を姓氏として使用したか、一部が中国式の漢姓を使用した以外に、大半が当時日本で普通に使用された日本式の姓氏を使用していた。『新撰姓氏録』が編纂された9世紀の初めにはすでに日本の姓氏が中国式の漢姓と異なる体系を形成されていたことを物語る。

そして日本が基本的に中国式の漢姓を採用しなかった点、古代の土着貴族の起源を記紀神話の中の神々たちに帰結させている点を考えると、古代の日本で姓氏を創製していく過程で朝鮮のように事実と関係なく始祖たちの出自を中国に求める現象がそれほど一般化しなかったと判断できる。

日本では古代の王族、土着貴族の起源を記紀神話に求めたことが日本人の祖先意識に大きく影響を与え、平安時代以降から日本の有力な家系の多くが記紀神話の神々、特に天皇の子孫と名乗る現象が濃厚になっていった。

6. おわりに

本発表では、中国、歴史上における中国周辺の異民族、ベトナム、朝鮮、日本を対象に、それぞれの姓氏の形成過程を分析し、その特徴を明らかにしながら、東アジアにおける姓氏の発生と祖先意識及び神話伝説との関連性について論じた。中国、朝鮮、日本の場合は、古代の王族、貴族たちが姓氏の形成過程において、祖先の源流をそれぞれの神話伝説に求めることが濃厚であった。ベトナムの場合は資料の制限があり、この問題について十分に

究明できなかった。しかし、ベトナムにおいても姓氏が王族の姓氏に集中する現象を見せている。満州・モンゴルの場合は、現在のところ、姓氏の発生と神話伝説との関連性は明確には見出せない。中国、朝鮮、日本のように多くの王族、貴族が祖先の源流を神話伝説に求めることがなかったようである。同じ東アジアにおいても姓氏の発生過程において祖先の源流を神話伝説に求める現象は漢字文化圏に特に顕著な現象であると思われる。

主な参考文献

- 巫聲恵編著『中華姓氏大典』(河北人民出版社、2000)
- 何曉明著『姓名与中国文化』(人民出版社、2001)
- 籍秀琴著『中国姓氏源流史』(文津出版社、1997)
- 陳絜著『商周姓氏制度研究』(商務印書館、2007)
- 張淑一著『先秦姓氏制度考索』(福建人民出版社、2008)
- 楊復竣著『中国伝統文化之根—中国本源文化伏羲文化・中国姓氏史』(上海大学出版社、2010)
- 陳連慶著『中国古代少数民族姓氏研究—秦漢魏南北朝少数民族姓氏研究』(吉林文史出版社、1993)
- 杜若甫主編『中国少数民族姓氏』(民族出版社、2010)
- 崔徳教・李勝羽編『韓国姓氏大観』(創造社、1985)
- 片泓基著『韓国の姓氏発生史及び氏族別人物史』(良賢齋、1999)
- 金正賢著『興る姓氏滅びる姓氏』(朝鮮日報社、2001)
- 『日本姓氏家系総覧』(別冊歴史読本・事典シリーズ第11号)(新人物往来社、1991)
- 太田亮著『姓氏と家系』(創元社、1941)
- 阿倍武彦著『氏姓』(至文堂、1966)
- 佐伯有清著『新撰姓氏録の研究 研究篇』(吉川弘文館、1971)
- 劉慶華編著『満州姓氏綜録』(遼寧民族出版社、2012)
- 趙力編著『満族姓氏尋根辞典』(遼寧民族出版社、2012)